

「光琳かるた」の絵を読む

——高砂の松など——

三宅晶子

『百人一首』は『竹取物語』『枕草子』と並んで、小学校・中学校・高等学校それぞれの国語に教材として取り上げられている、数少ない古典作品である。それだけ日本文化に広く深く影響を及ぼしており、国語教育界において、どうしても知っておいて欲しい古典という意識が強い作品なのである。

藤原定家の撰歌集であるから、定家の好みを知る上で興味深い。また『古今和歌集』から『新古今和歌集』までの八代集と『新勅撰和歌集』を中心に編まれ、後鳥羽院・順徳院の歌のみ例外的に定家の時点では勅撰集未収歌であるが、定家の死後勅撰された『続後撰和歌集』に入首しているので、すべての歌が勅撰集入首歌ということになる。天智天皇・持統天皇・柿本人麻呂・山辺赤人歌は『万葉集』に原歌が存在するので、『万葉集』も視野に入れることにもなる。鎌倉初期以前の和歌史を知る上でも、便利なアンソロジーである。冒頭と末尾の二首ずつが天皇の歌であることに顕著なように、百首の配列にも配慮が見られる。しかし『百人一首』の魅力の第一は、自由に身勝手に歌を鑑賞できることではないかと、

私は考えている。和歌を解釈する際、歌そのものだけでは意味が限定できないことが多い。どの歌集のどの巻の、どの辺りに配列された歌かとか、詞書きや作者の情報によって、はっきりとした内容が明らかになる場合が多い。しかし江戸期に入って広く一般庶民にまで流布した歌かるた形式の『百人一首』の場合、一首の歌が二枚に分けて記され、一首ずつばらばらに鑑賞・暗唱されるのである。どういう状況のどういう歌かという背景は、殆ど関係がなくなる。人々はその時その時の受け取り方で自由に歌の世界を味わい、楽しんできたのである。

その好例が、尾形光琳が描いたとされる「光琳かるた」(個人蔵)ではなかるうか。光琳筆の素描も現存するので、何らかの形で光琳が関わっていたと考えられている。現物は未見だが、『光琳カルタで読む百人一首ハンドブック』(久保田淳編、二〇〇九年小学館刊)には、読み札も取り札も全てカラー掲載されているので、有難い。

読み札には作者名と上の句、ふっくら丸い特徴的な作者絵が描かれ、取り札には下の句

と、様々な風景画が描かれている。作者絵も、後代のそれとの関連やら、それぞれにどのような衣装やポーズが与えられているか、興味深い点が多い。しかしそれ以上に興味深いのが、取り札の絵である。当時の常識的な解釈か、光琳の自由な発想の反映か、そのような視点で見ると、面白いことが色々わかってくる。

例えば猿丸大夫

奥山に紅葉踏み分けなく鹿の

声聞く時ぞ秋は悲しき

「紅葉踏み分け」なので、当然のように真っ赤に紅葉した楓の木と鹿を描いている。しかし、『古今和歌集』では秋上に、仲秋の萩の黄葉を詠んだ歌として配されている。確かに「踏み分け」という表現は、萩にこそ相応しい。しかし定家は『定家八代抄』で秋下に配置し、晩秋の楓の落葉を踏み分ける妻訪の鹿と解釈している。定家自身が勅撰集の配列的縛りを逃れて、新たな解釈を示しているのである。それ以後紅葉という解釈が一般的になったらしい。『百人一首』では一首独自の世界を立ち上げらせる鑑賞法が可能であるから、どちらでもよいのだが、「光琳カルタ」は紅葉と鹿を配している。

在原業平の

ちはやぶる神代も聞かず竜田川

からくれなゐに水くくるとは

の場合、竜田川に流れる紅葉を括り染めに見立てた歌であるが、頭昭が「水潜る」という新しい解釈を示し、定家もその説を支持した(『頭注密勘』)。以来江戸期を通じて潜る説が

一般的であつたらしく、光琳かるたでも勢いよく流れる竜田川に数枚の紅葉が散り潜る、動的な絵柄を採用している。

その他にも、阿部仲麿

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

では、海上に浮かぶ満月が描かれ、仲麿が思い出している三笠山の月ではなく、中国で見ている月が描かれていて面白い。西行の

嘆けとて月やはものを思はする

かこちがほなるわが涙かな

では、下弦の半月が低く描かれ、それだけで物思いは真夜中になされていることを示している。字面から読み取れる歌意ではなく、さらに一歩踏み込んで解釈された表現となっている。

取り札の絵は、抽象的な草花や風景も多いが、歌に対する解釈が端的に表現された個性的な図柄も交じっているのである。

私が特に注目したのは藤原興風の

誰をかも知る人にせむ高砂の

松も昔の友ならなくに

である。よく見ると、描かれているのは夫婦松である。この歌で夫婦松が描かれているのは、能(高砂)の影響としか考えられない。

世阿弥作の神能(高砂)は、前場で高砂・住吉の松は相生であるとして、松の精が老人夫婦となって出現する。登場の段には、この歌が利用されている。後場には雄松の精が住吉明神として現れ、御代を寿ぐ。江戸時代には祝言の謡として一般庶民にまで幅広く親しま



れていた能である。

しかし『百人一首』のこの歌は、長寿と言われる高砂の松でさえも昔からの友ではないと、自分の老いを詠嘆する内容なので、夫婦松を想定しているわけではないし、(高砂)の内容とも無関係である。光琳かるたを作成するにあたって、「高砂の松」といえば能(高砂)であり、それならば相生の松と連想されての図柄なのである。能が江戸文化といかに密接に関わっていたかを示す一例が、光琳かるたにも見いだされて、興味深い。

能とは関係ないが、ついでにもう一つ、面白い図柄を紹介しておきたい。伊勢大輔のいにしへの奈良の都の八重桜

けふ九重に匂ひぬるかな

で、満開の桜の枝の下に、黒と白の四角い物が置かれた絵である。これは一体何だろう。私は、奈良から桜の枝を運んでくるときの入れ物だろうと思っている。上の白いのが、直接枝を包む畳紙であり、黒い方は折りたたみ式の入れ物なのだろう。漆塗りに金泥で絵が



描かれた豪華な箱である。

奈良の八重桜は現在天然記念物に指定されている。株を増やすことが難しく、当時でも京の都には無い珍しい品種であったのだろう。それが美しく咲いて無事に届いたのである。『伊勢大輔集』の詞書きによると、一条天皇・中宮彰子・道長など臨席するなか、紫式部に譲られて、新参者の伊勢が花の受け取り役を仰せつかり、即興で詠んだ歌である。そんな晴れがましい様子を知って鑑賞するもの面白いが、歌だけの世界で突き詰めても、花を運ぶ難しさには思い至れる。それに答える様な絵なのである。私は絵の趣向に気付いてから、どうやって散りやすい花を運んで来たのだろうという疑問が湧いた。絵の作者はなかなか読みが深い。

これほどユニークな絵は他にはないのだが。

かるたの写真掲載に当たっては、関係各位にお世話になった。深謝申し上げます。

(横浜国立大学教授)